

2012年

## 課題作文優秀作品【小学部】

F・Tくん（川和小）

ぼくは、西郷隆盛さんについていきたい。なぜなら、国より人を大切にしようとしている人だからだ。国家は人に支えられて、成り立っている。国を動かすために必要なお金や労働力は、国民が国に提供しているものである。だから新しい国家ができたばかりで混乱している国を支えるためには、人々を一つにまとめることが大切だと思った。西郷さんは正しいと思う。

しかし、反乱を起さなくてもいいのではないかとも思った。西郷さんは、矛盾した大久保さんの行動に裏切られたと思っていたのではないだろうか。しかし、反乱を起したら国家は、バラバラになってしまうため、西郷さんも矛盾していたのだ。同じ出身地で幼なじみの二人であり、大久保さんはずっと友だちと思っていたので、きちんと話し合えば解決できたはずだ。

もちろん大久保さんにも良いところはある。それは、自分自身の信念をしっかり貫き、現実的かつ柔軟に考えているところだ。でも、ぼくが考えるリーダー像は、みんなを一つにまとめようと努力する人だ。ぼくは、ミニバスケットボールクラブチームのキャプテンになって、みんなをまとめて引っ張っていくことが、どんなに大変なことか分かった。大久保さんのように友だちとケンカをしたり、意見をすぐ変えたりすると、仲間がバラバラになってしまう。逆になくなってしまおうと思う。逆に西郷さんは、ぼくが考えるリーダー像にぴったり当てはまっていると思う。それは、自分の命を犠牲にしてでも人民の心を一つにまとめようと努力していたからだ。大久保さんとは違って、まとめること一筋で意見を変えないで考えていたから、世間の人々も西郷さんに同情的であったので信頼も厚かったと思う。だからぼくは西郷隆盛さんについていきたい。

K・Rくん（荏田小）

私は大久保利通についていきたいと思った。

西郷隆盛は、朝鮮に圧力をかけて、人民の心を一つにしようとしていたが、これだけでは、もし、朝鮮と話し合いが成功しても、人民の心が一つになるだけで、決して新しい国家が創れるとは思えない。また方が一、戦争にでもなったら、巨額の金が必要になり、新しい国家を創るどころか、また身分の差ができ、江戸時代のような国家になってしまうのではないだろうか。

それに比べて、大久保利通は、日本より文化・文明・政治が進んでいる遠いヨーロッパまで行って、ヨーロッパから学んだものを日本を変えるために使おうとしていた。また、人々の不満をそらすために、初め反対していた西郷隆盛の意見も取り入れて、速やかにヨーロッパ並みの国家を創ろうと現実的で柔軟な態度をとったことにも賛成できる。

大久保利通は幼なじみで親友だった西郷隆盛が反乱を起こしたこと、そしてそれを沈めるために、「討伐せよ。」と命令したこと、さらに、西郷隆盛が自殺したことは、とても悲しかったと思う。一方、西郷隆盛も、親友の大久保利通に自分の考えを否定され、最後は追いつめられて、悲しかったと思う。

実は、僕も以前に西郷隆盛の立場だったことがあった。学級会で学校のスローガンを決めた時、僕の意見は親友の意見が選ばれ、この二つで多数決をとることにになり、僕の意見は親友に反対され、おまけに多数決でも負けてしまい、とても悔しい思いをしたことがあった。

今回、この課題文を読んで、今の日本があるのは、大久保利通と西郷隆盛のおかげだと思った。歴史的偉人が、何をしたのか、またその時どういう気持ちだったのかということを知りたいと思った。

T・Kさん（いぶき野小）

私は大久保利通についていきたいです。なぜなら、日本だけではなく、他の国々を実際に見ているからです。よく「違う視点から物事を見てみる」という言葉を耳にします。目の前にあるものだけを大切にしているも、見えてくるものだけをとらえても、なかなか良い考えが思いつかないということが人にはよくありがちです。

私は、西郷は目の前のものを見すぎではないかと思いました。それに対して、大久保は目の前のものをしっかり見つつ、広い世界も同時に見えてくえ方が豊かなのではないかと思いました。

また、私は大久保には、リーダーに必要な二つの要素を持っていると感じました。

一つは、知識・考え方が豊かであるところです。やはり、知識・考え方が豊かな人が学級会の司会を行うとスムーズに話し合いが進行し、説得力もあるからです。

二つ目は、冷静さ・判断力です。大久保は西郷が朝鮮に行く話を聞いた際に、戦争が激しくなり巨額のお金を使うことになれば、いつまでも新しい国づくりが出来ないと考えをまとめていたからです。

私は、大久保のような冷静さ・判断力を身につけたいです。そのために一年間で積極的にいろいろな代表の仕事をやりたいです。特に、判断力を高めたので、司会などのしきる仕事を頑張りたいと思います。

## 課題作文優秀作品【中学部】

E・Tくん（川和中）

私は、西郷隆盛についていきたい。なぜなら西郷隆盛の意見が通った時の今の世の中を見てみたいからだ。

確かに、最悪戦争にもなりかねないような行動に出ようとしている西郷の意見に賛成できない大久保の気持ちも分かる。本文にもあるように、戦争が激しくなると巨額の金を使うことになれば、いつまでたっても新しい国づくりを進めていくことはできないと思うからだ。さらに、大久保は実際にヨーロッパに足を運んでいるわけだから、相当焦りもあつたのではないだろうか。西南戦争を鎮圧し、大久保の意思を継いだ伊藤博文の政治が日本を近代国家として発展させていくわけだが、君主権の強いプロイセン憲法を手本とした大日本帝国憲法の施行、それにより軍事が強化されていき、戦争へと発展させていくところを見ると、決して日本の国民が幸せになったとは言えない。

しかし、もし西郷があの時朝鮮に渡り、殺されずに帰国して日本がまとまっていたらと思うと、とても興味深い。本文にある「日本国民全てが『朝鮮と戦争するぞ』という気持ちでまとまる」という考え方には賛成できないが、人々の気持ちを一つにまとめることを第一に考えるのは正しいと思う。なぜなら今の日本において一番大切なことは、日本国民が一つにまとまることだと思うからだ。

この前、テレビで日本人は政府を信頼している人数が他の国と比べて、はるかに少ないと言っているのを目にした。たしかに昨年の大震災以降、政府のまとまりの無さが国民の不満をつのらせている。

つまり今の日本に必要なのは西郷のような統率力を持ったリーダーであると考えられる。しかし、今の世の中でそのようなリーダーが現われるとも思えない。だからこそ、西郷が人々の気持ちを一つにまとめ、立派な国家を築いてくれることに、期待を込めて、私は西郷隆盛についていきたい。

○・Nさん（東山田中）

私は大久保利通についてきたい。なぜなら、彼は日本だけでなくヨーロッパの文化、文明、政治などを学び、世界的、そして他国のことを知ってよい部分を取り入れようと考えていたからである。

一方、西郷隆盛は国民の不満をそらすことに気をとられすぎて、「戦争」をすることすら考えてしまっているのである。戦争をすると他国との友好関係、城の崩壊やケガ、死亡した人々や金銭問題など、たくさん失うものがある。戦争中はよいが、戦争後はさらに人々の不満が増えてしまうのではないだろうか。

大切なのは、発展し、新しい何かを築いていくことだ。早すぎる変化は破壊を招き、原形を残す間もなくなってしまう。だがそれと反対に、変化をしないと取り残されていってしまう。だが、彼らのいた時代は、取り残される寸前だったのではないだろうか。大久保利通のように今までと違う考え方をし、「新しい日本」をつくりたいという想いが今の日本を作り上げていると私は思う。今の日本が彼の望んだ日本かは分からないが、彼の日本を変えたいと思う気持ち、現実的な考え方などが、新しい日本を築ききっかけとなったのであると、私は信じている。

今の日本に「世界を変えたい」と自分から言い出せるような勇敢な人間がいるだろうか。そんな人間がたくさんいたころは、世界を変えるチャンスがたくさんあったのだろう。今の日本に足りないのは、彼らのような勇敢な人間ではないか。その足りない部分が埋まれば、また新しい世界が築けるであろうと私は思う。そう想像できるのは、彼らのことを知ったからである。何かを知れば、何かが見えてくる。世界はそうして変わっていく。そう思うからこそ、私は大久保利通についていきたい。

○・Rくん（東山田中）

私は大久保利通についていきたい。しかし、大久保の行動や考えに賛同したというより、西郷の行動や考えと比べたら、こちらのほうがよいと思ったからだ。

まず取り上げたいのは、犠牲者を出したかどうかという点だ。西郷は最終的に自ら戦争を仕掛けて負傷者を出して、最後に自殺した。負傷者を出してしまったことに対する罪を償わないで罪から逃げた。民衆と理想のために戦ったのにも関わらず、理想も守れず民衆も守れずに負の財産と一つの功績だけを残した。一つの功績を残してはいるが、犠牲が多すぎる。

次に述べたいのは、二人の考え方についてである。大久保は民衆も考慮した国側の考えで、西郷は民衆だけを考えていた。大久保は国の考えと民衆に見える想いと、外国で得た知識を使っているから、未来のことも含めた現実的な問題から解決していこうとしている。西郷は、自分が考える民衆の精神面や自分の理想で動いており、目の前にある壁を壊すことだけに力を使って、壁の瓦礫をどうするか、壁の先にどんな問題があるかを考えていない。そのような行き当たりばつたりの人に国を任せられるだろうか。私なら任せることは出来ない。そして、自分の案が通らなかつたら逃げるような人についていきたい。

結局、西郷が逃げたことに同情して人々が反発したため、戦争を起すわけであって、西郷だけでなく、民衆も、そして拒絶して戦争のきっかけを作ってしまった国も悪い。平和的解決を望むなら、意見が少ない側の気持ちも踏まえ、一番よい方法を考えなければ、よい国とも正しい行いともいえない。この世に真実たる正しさは無い。また、完璧な行いも無い。何かを得るためには何かを犠牲にするにしても、人の命を犠牲にした西郷にはついていけない。

私は、大久保利通についていきたい。

まず、二人の考えの違いをまとめてみた。大久保は、とにかくヨーロッパの国々の姿を真似ることによって国家としての形を創ろう、人民は自然とついてくるはず、と考えていた。つまり、日本も仕組みや文明を築こうという考えだ。

それに対し、西郷は、征韓論を利用して人々の不満をそらし、人民の心をついにしようという考えを持っていた。しかし、この考えは最悪の場合、戦争を引き起こすものだった。このように、考えの違いを見ると、大久保の意見は「現実的で柔軟」という長所と「人民の心が一つにならないのではないか」という短所がある。また、西郷の意見には「人の気持ちを大切にされた政策」という長所と「戦争を引き起こす可能性がある」という短所があった。

次に私は、もし西郷の意見が通っていたらどうなっていたか考えてみた。西郷自身は、朝鮮と話が通らなくて自分が殺されたとしても、日本国民すべてが「朝鮮と戦争するぞ」という気持ちで結局はまとまると思っていた。そこで私は疑問に思った。本当に日本国民全てそう思うだろうか。私は、そういった点で西郷には少し考えに現実性が欠けていたと感じた。こういった点では、「日本をまとめたい」という西郷の気持ちも正しいとは思えないので短所となってしまう。

このようなことから私は、大久保利通を選んだが、正直、私はどちらにつく気もない。それは、この新しい国家を創ったのは大久保だけでもなく、西郷でもない。この二人だと思っただけだ。なぜなら、西南戦争の後に世の中の人々は「武力で政府に対抗するのは無理」と学び、結果として、「武力よりも言論で」という考えを後世に残したからだ。もし、この二人が同じ時代に偶然会わなかったら、今のような日本は無かったかも知れない。私なら、そう考

える。